

柿の木と牛

今坂柳二

ある家の庭先に、柿の木が生えておった。あんでも「姉ちゃんの柿の木」って言うていらしい。んでも、それは家の中だけの話で、いくら近所の年寄りに聞いたって又カに釘打つような返事が返るだけだつて。

その頃だった、姉ちゃんが病気になったのは。高熱を出して食事を受けつけません。おカユもだめオジヤも受けつけません。これ見ろ、デカあんちゃんが淵に行つて、クキとハヤひつつかめえてきたぞ。これ食べる。チーあんちゃんは、河原へオキ針仕掛けに行つたようだ。きつとウナギでもぶら下げてるだんべ。

ところが、こちらは姉ちゃん・・・そんなもん、いやだよー。あたいは柿が食いてえだよ。早くもぎつてきてよう。

こりゃまあ、あんちゆうこんだんべ。おなかをこわしたのに、生ま柿を食べてえなんてよ、これじゃあ、しつちやかめつちやかじゃ。

さて、姉ちゃんの家は、仕事大好きな精農家でありました。んで、おとなしくて力持ちの牛を飼つておつた。なんで牛？ 馬じゃないんかちゆうかつて？ それはな、馬は軍馬になつて戦地で働いておるんじゃ。んだからその頃、田畑で仕事したのは腰が曲がつたお年寄りと足がおそい牛ばかりということなんじゃ。

五月二五日、水富村笹井の上空に焼夷弾を腹一杯つめこんだ四回爆撃機が迫り、青と赤い火の玉が川向こうのハンダ醤油工場から白髭神社を、一直線に火の海にしちまつたんじゃ。

その夜。「姉ちゃんの柿の木」は焼けただれ、近所の衆がタクジンさんと呼んでるぢいちゃんは、牛を逃がそうと火中に飛び込んで大火傷・・・脚を引きずつて歩く姿が、今も目にうかぶんですよ。

ふり返ると、つい先年になるなあ。生活が変わつて柿を食べなくなった一家は、相談して柿の木を切ろうということになった。焼土の中から掘り出した「姉ちゃんの柿の木」、家族が声をあげておどろいた。何ということっちゃ、この根っこ、焼けただれぢいちゃんの脚にそっくりだったと。焼夷弾にやられて七十年も経つたというのに。何ともおそろしいこつちあ。

いまさか りゅうじ

狭山市笹井在住。二十四歳から俳句に関わつて、現在同人誌「つばさ」代表。かたわら、昔ばなしの採集・採話を続け、「龍じいの昔ばなし」以下十冊発行。

編集後記

平成最後の年になりました。昨年からカラー版となり、紙面が明るく見やすくなりました。これからも内容も充実した紙面を心がけてゆきます。

先日、71歳で急逝された諸口高男氏の通夜は、各方面の役職を熱心に取り組んでおられたので大勢の弔問でした。私の関係する狭山市民謡協会の会長（現相談役）として尽力され、文団連では第9回芸術祭実行委員長を勤め、賛助会員でした。

9月にお会いした時、お元気でしたのに、慎んでご冥福をお祈りします。

(高沢正夫)